農と暮らしの新たな視点を探る

産直コペル

sanchoku coper

2016.9 Vol.19

土から育てる VOL.8

味は土で決まる 高原野菜

特集1 被災地・熊本の直売所を訪ねて

特集2 たてしな自由農園

「農家と共に歩む」民間直売所の挑戦

ふるさとの“リアル” その2

お米づくりを辞めて程なく逝ってしまった父

脱稲作化する北陸の農業生産法人

――東京農工大学　野見山敏雄――

7月9日～10日に食糧の生産と消費を結ぶ研究会が主催する夏の現地学習交流集会に参加した。今回は富山県と石川県の先進的な農業生産法人5社を視察した。特に印象に残った2つの法人を簡単に紹介しよう。

一つ目は農事組合法人サカタニ農産である。同法人は富山県南砺市を拠点として360haを耕作する有名な稲作主体の法人である。サカタニ農産は1967年に任意組合として設立し、72年に農事組合法人になり現在に至っている。経営内容は稲作264ha、大麦61ha、大豆11ha、果樹2・7ha、野菜18haである。出資戸数26戸、従業員24名、グループ企業3社を含めて売上高は4億1千万円（2015年度）である。1985年に減農薬・減化学肥料栽培のPB米「ワールドエース」を生産するようになり、農協を通さず全国の問屋、小売業者、消費者に直接販売している。

（農法）サカタニ農産・奥村代表の話しを聞く参加者

（株）六星の本社・工場・直売所

同法人の最近の特徴は転作対応として大豆と大麦を栽培するほかに、リンゴ、モモ、小松菜、露地野菜などの労働集約的な作物栽培を増やしていることである。米の国内需要量が年々減少する中で、輸出への展望もひらけず、野菜作への傾斜が強まっているのである。代表の奥村一則さんは今後も同法人の脱稲作化は続くと話していた。

二つ目は（株）六星である。同社は1997年に石川県白山市の5名で任意組織を作り、農事組合法人、有限会社を経て2007年に株式会社となった。六星の特徴は、米や野菜の販売と共に、餅や和菓子、弁当、惣菜などの加工品の製造に力を入れていることである。売上高11億2千万円（2015年度）の内、米は2億1千万円に過ぎず、餅4億円、弁当・惣菜など2億1千万円、和菓子1億円と、米以外の売上げが8割を越えている。

社長の軽部秀俊さんは、米の製品差別化は難しく、輸出においてもアジアの富裕層相手の「小さな市場」をめぐって米の産地間競争をしていては、その限界が来ると断言していた。

視察の過程で繰り返し出てきた話があった。20～30haの大規模稲作経営がある日突然廃業し、それまで経営してきた水田を借りてくれないかとの依頼があるという。しかし、これまで地域農業の拠点だった農業生産法人は、その受け皿となる余裕はないのである。北陸は言わずと知れた稲作地帯である。それが低米価政策のもとで稲作の収益性が悪化し、野菜作や餅加工などに傾斜している農業生産法人が増えているのである。2年後に迫った米の生産調整の廃止までに、早急に総合的な生産対策を打ち出さなければ、美しい水田が耕作放棄されるかもしれない。

野見山敏雄さん
東京農工大学大学院農学研究院教授
東京農工大学で教鞭をとっており、最近の研究テーマは、半商品経済を組み込んだ農林産物の生産と流通に関する総合的研究である。主な著書には、産直商品の使用価値と流通機構（日本経済評論社）や食料・農業市場研究の到達点と展望（筑波書房，共著）など多数。2012年11月より地産地消優良活動表彰審査委員会・委員を務めている。

ノーブランドでもメイドインジャパンが売れる世の中に

何かに出会える〝期待感〟を持ってここに来店する人が多いと店のスタッフは語る。

開店当時は、駅から徒歩1～2分とはいえ、人の入りが悪く苦戦していたというが、徐々に、PRイベントやメディアで取り上げられるようになって、人の流れが変わってきた。「日本を応援しようという機運が高まってきた」県で見つけたこだわり商品だった。だが、最初は仕入れを依頼しても「卸す気はない」と断られたという。ところが菊水堂の社長は、その後、何度か店に来て様子をうかがっていたとのことで、その結果、スタッフの接客に心が動き、仕入れの許可を出してくれたのだそうだ。ただ、そんな絆を持ちながら、同商品はその後ほとんど売れない状況が続き、店側も「さすがにこれ

生産者と消費者がじかにつながる場所